

# 多摩産材で造る 安心マイホーム

「多摩産材で造る安心マイホーム」  
という弊社の記事が10・22の朝日新聞に  
掲載されました。

マイホームパートナー 代表取締役 林 守途

## アンテナショップ開店で利用に弾み

地の気候に適し、長持ちしやすいともいわれる。集成材や外材に不安を抱く人々にとっては、「産地がわかる安全な木材」として、注目を集め始めた。

秋川木材協同組合（あきる野市）が春に開いたアンテナショップをきっかけに、多摩産材を使った家の建築が日野市などで進んでいる。地元の木材はその土

## 天然材の良さ 注目

多摩産材をPRする店は今年5月、あきる野市の観光ルート沿いにオープンした。それを知った日野市の住宅設計・施工会社経営、林守途さん（53）が「地元産材を使いたい」と申し出た。住宅メーカーから4年前に独立した林さんは、シックハウスなどに悩む人々と接した経験から、天然素材の家づくりに力を入れている。

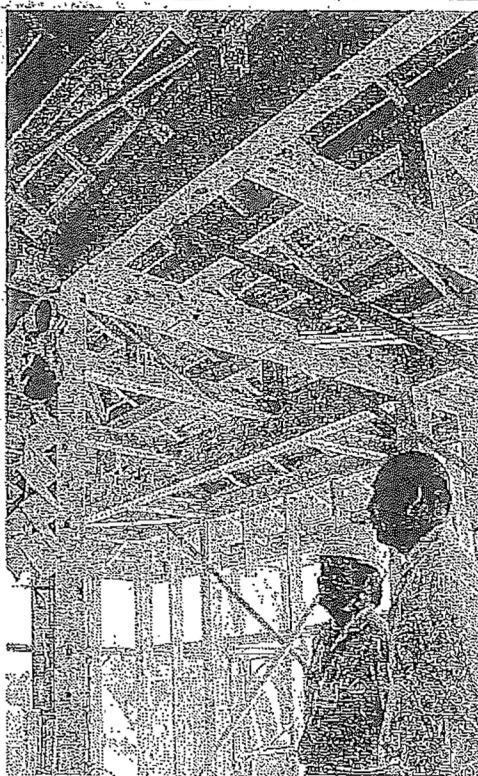
人、立川市の鈴木孝子さん（37）は「家は生活の基盤だし、子どもが成長していく場所。安心できる地元の産材を選んだ」と話す。夫も同じ考えだった。

立川市の別の女性（45）は「人暮らし。『アレルギー』を起しやすい家族が多いので、集成材の接着剤が心配だった」。何

年もかけて住宅メーカーを回ったが、集成材や外国産ヒノキが目についた。「多摩産の柱なんてあり得ない」と思っていた。杉なら価格も同じくらいと聞き、決めた。

首都圏で流通する木材の多くは安い外国産か、国内の大産地が供給するものが大半という。このため、木材の産地の多摩地域にいながら、「地産材の供給元をずっと探していた」と林さん。木店などを通さず直接に入れるため、価格は杉から外材とほぼ同じ、ヒノキは1〜2割高い程度で収まるといふ。

一方、組合側は多摩産材のニーズを知って気をよくする。建築現場で組み立てられるように加工する工場がなく、茨城直まで持ち込んで委託加工を依頼なくされる。こうした課題もあるが、担当者は「地元の山の木を産材としてもっと使ってもらい、山がよみがえりよう力を入れた」と話している。



多摩産のヒノキや杉を使って建築中の住宅。日野市万願寺で